

[シンポジウム]

バルト・スラヴ世界におけるチュルク系少数言語

——カラライム語とガガウズ語——

栗林 裕

はじめに

本稿ではバルト・スラヴ世界の周辺的地域で話されているチュルク系言語であるカラライム語と黒海周辺地域で話されているガガウズ語の形態・統語構造に主に注目して、スラヴ系諸言語との接触により発達するに至った諸特徴を取りあげる。特にカラライム語は、チュルク諸語の中でも話者数が極端に少ない危機的少数言語として知られている（話者数は後述）。またモルドバ共和国やウクライナやブルガリアに分布するガガウズ語もチュルク諸語の中では少数言語の一つであると言える（モルドバ共和国でガガウズ語を母語とする人数は2004年度統計137,774人¹⁾）。特にこれらの言語に注目する理由は、言語類型論的にOV語順が優勢な他のチュルク諸語の中で、この二つの言語はVO語順が優勢な言語として知られているところにある。両言語は地理的には、バルト海沿岸と黒海沿岸というように地理的に離れているが、なぜこれらの言語のみが、このような統語的特徴を持つに至ったのであろうか？例えばブルガリアにおいては、イスラム教徒であるバルカン・トルコ語の話者（2011年度の統計では、588,318人で全人口の約8%を占める²⁾）が国内で二番目に多い話し手であるが、同じようにブルガリア語と共存する中で、なぜガガウズ語だけがVO語順が優勢であるという特徴を持つに至ったのか不思議に思われる。カラライム語とガガウズ語の言語社会に共通する特徴は、非ムスリムの民族であることと、口語に基づく書記体系を近年まで持たなかったことにある。このような宗教文化的な固有の事情により、周辺のムスリム系のチュルク語話者から孤立し、独自の言語社会を發展させていったと推察される。本稿では両言語を比較しながら、スラヴ系言語との言語接触によるチュルク系言語にみられる言語変化の一端を明らかにしたい。

1. リトアニアのカライム人

リトアニアに居住するチュルク系民族は、主にイスラム教徒のタタール人とカラライム人（Karaim）であるが、カラライム人の末裔は1397年のクリミアでのモンゴル族の黄金のオールド（Golden Horde=金帳汗国）への遠征後に、ポーランドーリトアニア王のヴィータウタス大公が380家族のカライム人を城の傭兵として連れてきた時に遡る。バグダッドからビザンツ帝国を経てハザール帝国にまで達したカラライム人の宗教

は、クリミア半島から今日のウクライナ西部やリトアニアにまでカライム人が居住することで広がっていった。

カライムという語はヘブライ語の「読む」という動詞に関係づけられ、ここでは「聖典を読むこと」の意味になる。カライム人の宗教は、9世紀にバビロニア（バグダッド）で成立し、広く中東に広まったとされる。タルムード等の口伝律法を認めず、ヘブライ語で書かれた旧約聖書のみに従うことを特徴としている。リトアニアのトラカイのカライム人は1441年には市民権を認められ、当時の自治区を形成することが出来たとされる。それ以来、農業や園芸、家畜業や手工業に従事し、徐々に中産階級に進出するようになった。さらにトラカイから、首都のヴィリニユスやポーランドの首都のワルシャワに移住した。2003年の報告³によると275人のリトアニアのカライム民族共同体の中でカライム語で読み書きと会話ができるカライム人は28人に過ぎないとされる（ポーランドでは126人中、読み書きと会話ができるカライム人は11人、ウクライナでは2名）。

2. カライム語の言語的特徴

カライム人の母語であるカライム語はトルコ系言語（チュルク語）の西キプチャクグループ（他にカラチャイ語、クムク語、クリミア・タタール語などがある）に属する言語であり、トラカイ方言、ハリチ方言、クリミア方言の三つの方言に区分される。リトアニアで話されているカライム語はトラカイ方言と呼ばれる西部グループに属しており、南部グループのクリミア方言との方言差は大きい。さらに、カライム語の置かれた環境より、ポーランド語やロシア語やリトアニア語などからの文法的、語彙的影響がみられる。カライム語はもともとヘブライ文字で書かれており聖書をカライム語に翻訳した手書きの文書が残されている。旧ソ連時代には、キリル文字が使用されていた。今日ではリトアニア語の正書法による宗教書や文学作品、初学者用の文法書などが出版されている。その正書法はそれぞれの地域により異なるが、昨今のインターネットの普及により、ポーランドやクリミアやトルコに在住のカライム人同士の交流も行われているようである。特に近年では、トラカイにおいて言語活性化運動にも力が入られるようになり、毎年夏季に言語講習会なども開かれ、ポーランド、ロシアやウクライナからもカライム人が学びに来るといふ。

カライム語の言語的特徴のうち、注目されるものは音韻、形態、統語、語彙等の文法の全てにおいてみられるが、本稿では特に周辺言語との言語接触による言語変容の中で際立ったものに限定して言及することにする。カライム語の音韻構造は /u/ /i/ /e/ /ä/ /ö/ /ü/ /u/ /o/ /a/ の典型的なチュルク語の母音システムを持つ。また、音節の持つ素性である [+front] あるいは [-front] が弁別的になり超文節音素を成す。具体的には口蓋化として実現し、以下の語においては口蓋化の有無が音素的対立をなしている；

kioź [k'ɔz] 'eye' vs. koz [koz] 'nut'. なお、このような口蓋化による子音の同化現象はガガウズ語にもみられる。これらを含めて、音節間の音素特徴について母音の前方性や円唇性 [frontness, roundness] についての調和がある点では典型的なチュルク語の性質を保持していると言える。

形態的特徴として、スラヴ語からの女性接辞をそのままコピー⁴していることをあげることができる; haver 'friend' vs. haver-ka 'female friend'. 文法的性 (ジェンダー) を表示するために接尾辞を付加するが、このような女性接辞の付加はガガウズ語やバルカン・トルコ語にもみられる。また散発的ではあるが、文法的性のコピーは形容詞の語形変化にもみられる。一般的にチュルク諸語の形容詞は活用形を持たないが、以下の例では主語の文法的性に応じた語形変化がみられ、接触する言語からのコピーとされる。

形容詞の女性形活用のコピー (散発的)

(1) ol è-di intelligent-na.
 she COP-PST.3SG intelligent-feminine
 'she was intelligent.'

(Csató 2012)

カライム語の言語的特徴として最もよく知られているのは統語的特徴である。チュルク諸語の多くは、SOV の基本語順を持つが、カライム語の基本語順は SVO であるとされる。この点は、後述するガガウズ語も同じである。言語類型論で議論される VO 的言語特徴は、修飾構造の語順や関係詞構造の有無など広義の修飾関係を形成する全ての分野に影響を及ぼす。従って、修飾部と被修飾部 (主要部) の語順においても従来の OV 的な修飾部—被修飾部 (主要部) の語順に加えて、対称的な被修飾部 (主要部)—修飾部の語順も許される。その場合、名詞に付加される所属人称接辞は主要部に付加されるか (2a)、あるいは全く付加されなくても良い (2b)。ちなみにガガウズ語でも同様に VO 的特徴を持つため、修飾部が属格表示された場合は必ず被修飾部 (主要部) に所属人称接辞が表示されるというチュルク諸語の一般的な一致パターンに従うため (2a) のパターンは許されるが、主要部に所属人称接辞が表示されない (2b) のパターンは見出されない (栗林 2010: 217)。

Modifier-Head, Head-Modifier

(2) a. N-GEN + N(POSS) or N(POSS) + N-GEN

biź-niń bijlig-imiz [we-GEN country-POSS.1PL] 「私たちの国」

b. N-GEN + N or N + N-GEN

biź-niń bijlik [we-GEN country] 「私たちの国」 (Csató 2012)

VO 的性質が優勢であることは、主要部前置型の類型論的特徴を持つことを含意し、そのことは関係詞の使用を予測するが、予測通りガガウズ語と同様にカライル語でも関係詞の使用が認められる。カライル語の (3a) では関係詞に格が付加され文法関係が明示されている。

- (3) a. Bar-t kolega kajsy-nyn tierk
 exist-COP.3SG friend which-GEN soon
 altmyš jyl-y bol-ur.
 sixty year-POSS.3SG become-AOR.3SG
 ‘I have a friend who will soon be sixty.’ (Csató 2012)

- b. Ol vacht-ta è-di üriatiuvčiu-bia.
 that time-LOC COP-PST.3SG teacher-INSTR
 ‘At that time, he was a teacher.’ (Csató 2012)

VO 的性質は、前置詞型の類型論的特徴との相関を示すが、カライル語もガガウズ語も後置詞が発達しており、この点については当てはまらない。しかし (3b) のようにカライル語の後置詞 *byla* (with) が格となってしまったような例もあり、コピュラ文で一時的状態を表現する場合に名詞を具格で表示するというスラヴ語の文法パターンの影響がみられる。

カライル語にみられるその他の非チュルク語的特徴として、V1 (動詞前項) +V2 (動詞後項) の複合動詞における V2 の衰退をあげることができる。チュルク諸語の中でも、ユーラシア大陸西端にあるオグズ系のトルコ語では V1+V2 型の複合動詞の種類は少ない。しかし、ユーラシア大陸中央部に分布するウイグル語やキルギズ語では比較的豊富な V1+V2 の複合動詞を認めることができる。このような複合動詞の種類減少は VO 的特徴が顕著にみられるかどうかということと関連している可能性がある。

また、OV 的特徴が優勢なチュルク諸語では文末のモダリティ形式がよく発達しているが、カライル語ではほとんどのチュルク諸語でみられる間接的経験を示すモーダル形式 *-muş* を喪失していることも VO 的特徴の表れと指摘できる。さらに、これらはまたカライル語の疑問小辞の使用頻度の低さとも関連している。最後に、言語接触により生み出されたカライル語だけがもつ文構造を提示する。ポーランド語の疑問小辞 *czy* が統語的コピーされ節の初頭に置かれるという現象がある (Csató 1999)。統語的コピー⁵とは、コピーされる側での統語的特徴がコピーする側の言語に導入(コピー)されることをいう。

- (4) bil'-mim mień [mia kubit'kia bar-y-m]
 know-NEG-PRS.1SG I Q shop-DAT go-AOR-1.SG
 'I don't know whether I will go to the shop.'

この例では従属節の最初の位置に小辞が置かれるというポーランド語の文法規則がカライム語に取り入れられたが、ポーランド語からの小辞自体の語彙的コピーではなく、カライム語がすでに保持している疑問の小辞を従属節の初頭に置くというポーランド語の文法規則のみがコピーされている。ここで、カライム語の研究史について簡単に触れておきたい。カライム語は今日では消滅の危機に瀕した極小言語とされるが、比較的古くからの文献学研究の伝統がある。カライム語の文献学的研究や基本的文法書や最新の研究動向については、Csató (2010) が詳しい。

3. 黒海沿岸のガガウズ人

ガガウズ人とはキリスト教正教徒のトルコ系民族で、モルドバ南部をはじめとして、ブルガリア、ウクライナ、カザフスタン、ウズベキスタンおよびトルコにも居住している。なお、中央アジアのガガウズ人は 20 世紀初頭の移住によるものである。また、現在トルコに居住するガガウズ人はソ連崩壊後の出稼ぎによるものが多い。ブルガリアでは黒海沿岸部のバルナ近郊を中心にガガウズ人の村が散在している。ガガウズ人の歴史については諸説あるが、有力な説の一つとして次のようなものがある。黒海北方から来たトルコ系民族のペチェネク、ウズ（オグズ）、クマン（キプチャク）族がバルカンに居住していたが、12 世紀後半にはアナトリアのセルジュクトルコ人も居住するようになった。ドブルジャ（現在のブルガリア黒海沿岸地域）に移住したセルジュクトルコ人の一部は再度アナトリアに戻ったが、ドブルジャに残留した者はキリスト教に改宗し、それが今日のガガウズ族の末裔であるという（cf. Kowalski 1933, Güngör and Argunşah 1991）。ガガウズ人はドブルジャをはじめとするバルカンのさまざまな地域で居住していたが、18 世紀半ば、ブルガリア人の圧力やロシア人の煽動もあり、もとの故地を後にしてベッサラビア（現在のモルドバ）への移住を始めた。ベッサラビア地域は 1947 年にロシア領となりモルドバ自治共和国の一部となった。モルドバ共和国が 1991 年に独立を宣言したのに引き続き、モルドバ南部は“ガガウズ人の地”という名の自治区となった。モルドバ共和国の一部であるガガウズ人自治区の現在の公用語はガガウズ語、ロシア語、ルーマニア語である。次にガガウズ語の歴史について略述する。ガガウズ語とはチュルク語南西（オグズ）グループ（他にトルコ語、アゼルバイジャン語、トルクメン語、イランのオグズ系諸言語がある）に属する言語である。ルーマニア語に基づくラテン文字が考案された一時期を除い

て1957年にキリル文字によるガガウズ語の文字が考案されるまで、ガガウズ人は独自の文字を持たなかった。そして旧ソ連崩壊後にラテン文字へ移行し、現在に至る。社会言語学的状況について付言すると、モルドバ共和国のガガウズ人の総人口の中で占める割合は2004年度統計では約4パーセント⁶であるものの、モルドバ共和国南部にガガウズ人自治区を手にしたおかげで言語や文化を伝えていく活動が盛んである。1996年よりモルドバ共和国南部のガガウズ人の学校では公的にラテン文字に移行し、学校教育の一部でガガウズ語が教えられている。ガガウズ語による独自の教科書もあり、ガガウズ語の新聞や民話などの書籍も出版され積極的に若い世代にガガウズ語を伝えようとする努力がなされている。家庭内では中高年層は第一言語としてガガウズ語を使用し、若年層でもかなり流暢に話す人もいる。現在では、ロシア語とガガウズ語の二言語併用の状況が続いている。

一方、ブルガリアのガガウズ人コミュニティにおけるガガウズ語の状況は、モルドバのガガウズ語の状況よりも厳しい。母語の能力は中高年層でさえ十分なものではなく、普段は家庭内においてもブルガリア語を使うことが多い。孫の世代ではガガウズ語が使えるものはほとんどいない。2001年度の統計によるとガガウズ人は540名⁷とされ、モルドバよりも大幅に少ない。さらに学校教育において母語を教えるという試みもなく、ブルガリアのガガウズ語を母語とする話者がいなくなるのは時間の問題であると思われる。しかしガガウズ人としての強い自己意識を持っており、知識階級を中心に自分たちの文化の保存の努力をし、民族学的な研究をしようとする若いガガウズ人もいる。

4. モルドバのガガウズ語の言語的特徴

本節では、ガガウズ語の文法的特徴について重要なもののみ略述することにする。まず、ガガウズ語の重要な統語的特徴としてVO語順が優勢な自由語順ということがあげられる。OV語順が優勢なチュルク諸語の中で、本特徴はガガウズ語を特徴付ける顕著なものである。

(5) Vazgeč-ti cuvap et-mää.

忘れる -PST 答え する -INF

「答えることを忘れた。」

VO語順の優勢さはブルガリア語やロシア語等のスラヴ系言語の影響であるとされるが、スラヴ系言語の影響は統語法に限らず、文法のあらゆる側面にみられる。例えば、カライム語にもみられた通り、形態法における女性接辞 *-ka/-yka* の使用もこの特徴の一つである；*komşu-yka* (女性の隣人), *hacı-ka* (女性の巡礼に行った人)。このような

女性接辞のコピーはブルガリアに居住するガガウズ人の言語にも、またいくつかのブルガリアのイスラム教徒のトルコ語方言（バルカン・トルコ語）にも認められる。言語接触の観点からガガウズ語の状況を略述すると、ガガウズ人の祖先はカスピ海の北方でオグズ族の集団から分離したのち、ブルガルーキプチャク起源（チュルク系）の語彙に接触し、バルカンにやって来た。その後、オスマン-オグズ語と接触した。その結果、ガガウズ語はある面ではオスマン（トルコ）語、もう一方の面ではブルガルートルコ語、キプチャク語、カライム語との類似点を持つ。このような、民族の移動の痕跡は言語特徴にも現れ、コピーや音韻変化の結果ではないと考えられる長母音を保持している点や、カライム語の音韻特徴のところでみたキプチャク語群にみられる口蓋化による子音調和の存在などがある。系統的に一番近いとされるトルコ語にもみられないこれらの諸特徴は、そのルーツの多様性を示し、他民族との接触により保持するに至った言語特徴であると考えられる。

さらに語彙の面では、トルコ語、アラビア語、ペルシア語の単語をコピーすると同時に近年では近隣のギリシャ語、ブルガリア語、ルーマニア語、モルドバ語、ロシア語からも多くの語彙のコピーがある。例えば、日常的に使われる高い頻度のことばにもコピーによる外来語が使われる；こんにちは *selâm*（アラビア語）、はい *da*（スラヴ諸語）、いいえ *yok*（トルコ語）など。

5. ブルガリアのガガウズ語

ブルガリアではガガウズ語を母語とするガガウズ人は、キリスト教徒であるため、宗教を同じくするブルガリア人として認識されてきた。したがってモルドバ共和国の状況とは異なり、ガガウズ人としての話者数の公的な統計資料等がほとんどなかった。さらに18世紀末より19世紀初頭にかけてベッサラビア（現在のモルドバ南部）に現ブルガリア黒海沿岸より多くのガガウズ人が移住した。この理由でブルガリアにはガガウズ人は少数しか残っていない。しかし近年のインターネットの普及に伴い、ブルガリアのガガウズ人の状況についての情報も徐々に知ることができるようになった。

言語と言語が接触することにより共通の地域的言語特徴を共有するようになり、言語連合 (*Sprachbund*) が形成される。バルカン半島で生じた言語連合とは、ギリシャ語、アルバニア語、ルーマニア語、マケドニア語、セルビア語トルラク方言、ブルガリア語、そして場合によればジプシーのロマ語も含め、系統的な関係に基づかない共有の冠詞の後置や不定法の消失などのさまざまな文法のレベルで共有されている言語特徴のことである。つまり言語特徴の共有は言語が隣接することによる相互影響の結果、共通する言語特徴を保持することに至ったものと考えられる。バルカン言語連合にみられる特徴の一つとして「不定法の消失」がある。英語の簡単な例にたとえると *s/he wants to go* のような表現で *to* 不定詞が消失し *s/he wants goes* のような形になり、

従属する動詞が活用するようになる現象である。従来、この言語特徴は印欧語族だけにみられる特徴であるとされ、チュルク系諸言語はその中に含まれなかった。例えば Thomason (2001) は、南西ヨーロッパのトルコ語もバルカン言語連合の特徴を共有するが詳細は不明であると記述している。しかし既に Pokrovskaya (1972) ではガガウズ語とバルカン言語連合の関係を指摘し、不定法の消失はバルカン地域の印欧語に特有の現象ではなく、ブルガリアのガガウズ語にもみられるとした。具体例としては (6) にみられるように、トルコ語の述語 *iste-*「望む」は不定形 *-mek/-mak* 付きの従属節動詞を要求するが、(7) や (8) のガガウズ語では従属節動詞も主節動詞と同様の人称接辞や希求形のモーダル形式をとり、不定形をとらない（文中の [] 内は従属節を示す）。また、(9) のようにバルカンのコソボ・トルコ語にも同様の例がみられる。

(6) *ben* [git-mek] *iste-di-m*. [トルコ語]

I go-INF want-PST-1.SG
‘I wanted to go.’

(7) *iste-er-im* [gid-e-yim]. [モルドバのガガウズ語]

want-PROG-1SG go-OPT-1.SG
‘I want to go.’ (Pokrovskaya 1972)

(8) *iste-yor-lar* [čöju-un ismi-ni koy-sun-nar]. [ブルガリアのガガウズ語]

want-PROG-PL child-GEN name-ACC put-OPT-3.PL
‘They want to put children’s name.’ (Zajączkowski 1966)

(9) *Amica-m ste-y* [hacilig-a cit-sin]. [コソボ・トルコ語]

uncle-my want-PROG pilgrimage-DAT go-OPT
「私の叔父は巡礼に行きたいと思っている。」 (Canhasi ve Sulçevsi 2012)

cf. *Amca-m* [hacc-a git-mek] *isti-yor*. [トルコ語]

uncle-my pilgrimage-DAT go-INF want-OPT
「私の叔父は巡礼に行きたいと思っている。」 (Canhasi ve Sulçevsi 2012)

しかし、このような「不定法の消失」は、ガガウズ語のみにみられる現象ではなく、バルカン・トルコ語全体にも広くみられる現象である。(10a) はブルガリア北東部のデリ・オルマン地区で筆者が採集したバルカン・トルコ語の例であるが、トルコ語の対応例と比較すれば明らかのように、同様の「不定法の消失」が認められる。トルコ

語の *lāzım* (必要だ) は不定詞 *-mek/-mak* 付きの従属節動詞を要求するが、(10a) では希求形と人称接辞による活用をしている。また、(10b) のようにコソボ・トルコ語にも同様の例がみられる。なお、カライム語では、述語 *iste-* (望む) は不定形を支配し、不定法の消失は生じない。

(10) a. *ben pazar-a lāzım yarın gid-e-yim.* [バルカン・トルコ語]

I market-DAT need tomorrow go-OPT-1SG

「私は明日、市場に行かなければならない。」

cf. *ben yarın pazar-a git-mek lāzım.* [トルコ語]

I tomorrow market-DAT go-INF need

「私は明日、市場に行かなければならない。」

b. *Yarın lāzım jol-sun-lar.* [コソボ・トルコ語]

tomorrow need come-OPT-PL

「明日、彼 / 女らは来なければならぬ。」

cf. *Yarın gel-meli-dir-ler.* [トルコ語]

tomorrow come-need-COP-PL

「明日、彼 / 女らは来なければならぬ。」

このように、ガガウズ語に認められる「不定法の消失」や形態法における女性接辞 *-ka/-yka* のコピーなどの形態・統語的特徴は、周辺のトルコ語にも同様に認められることも多い。ガガウズ語のみにみられる代表的な統語的特徴として、以下の三点を指摘したい。まず一番目に表面的に二重与格構文 (cf. 栗林 2010) とみられるもので、(11a) のように二つの名詞の間に所有関係があり、統語的に動詞の右方向の周辺の位置にこれらが置かれた場合に所有者名詞と被所有者名詞が共に与格で表示される現象である。所有者名詞は、本来の格である属格とも交替可能であることから、二重与格構文とは主要部名詞の与格が修飾名詞にコピーされているとみなすことができる。影響の要因となる文は、(11b) のようなロシア語の構文であり、意味的に方向を表す与格や前置詞の意味的特徴の統語的コピーであると考えることができる。

二重与格構文

(11) a. *Karı-sı koy-muş on-a ekmek torba-sı-na.* [ガガウズ語]

wife-POSS.3SG put-PFT he-DAT bread bag-POSS.3SG-DAT

「奥さんは彼のパンを袋に入れた。」

b. Žena položila emu hleb v kotomku. [ロシア語]
 wife put he-DAT bread PREP-bag
 「奥さんは彼のパンを袋に入れた。」 (Pokrovskaya1978)

二番目の統語的特徴として、数量詞句における格の一致がある。(12)はガガウズ語の民話から抽出したものであるが数量詞 *hepsi* (全て) とそれが修飾する名詞は格表示に関して一致している。このような数量詞の一致は現代トルコ語では生じないが、13世紀から18世紀にかけてのチュルク語オグズグループの文語である古期及び中期オスマン・トルコ語では名詞とそれを後方から修飾する数量詞の間で格の一致があったという記述がある (Kerslake 1999: 197)。

数量詞の格の一致

(12) Al-miš Binbir İvan ana-sı-nı hepsi-ni bir
 take-PFT B. İ. mother-POSS.3SG-ACC all-ACC a

 kardaş-ları-ni da git-miş-lêr haydut-lar-ın
 brother-POSS.3PL-ACC and go-PFT-PL thief-PL-GEN

kale-si-nê. [ガガウズ語]
 fortress-POSS.3SG-DAT (Güngör and Argunşah 1991: 235)
 「ビンビル・イワンは母親や兄弟みんなを連れて泥棒の住処に行った。」

最後に、最も顕著なガガウズ語の統語的特徴として可能構文の形成がある。存在動詞 *var* (ある) と様態疑問詞 *nasıl* (どのように) と動詞の希求形あるいは不定形をこの順序で組み合わせることにより、可能形を構成する。否定の場合は、存在動詞を対義語である *yok* (ない) に交替させることにより、不可能を表す。このような分析的な可能形モーダル形式はガガウズ語のみであり、他のチュルク諸語にはみられない。

統語的コピーによる可能構文

(12) Bu lafları var-dı nasıl söyle-sin saade en iy dost. [ガガウズ語]
 this words exist-PST how say-OPT.3SG only best friend
 「この言葉は一番の友人にだけ言うことができる。」

Menz (2003: 35) では、この構文の由来として、ブルガリア語の *ima* (ある、所有する) と *kak* (どのように) のコピーと希求法の人称活用の組み合わせによる分析的な統語法であるとしているが詳細は不明である。なお、筆者が 2000 年にブルガリアのバルナ近郊で実施した聞き取り調査では、ブルガリアのガガウズ語では、このような分析的なモダリティ表現は使用しないとのことである。一方、モルドバのガガウズ語は、この分析的な可能形を口語でも頻繁に用い、民話のテキスト資料にも頻繁に出現する。なおカライル語でもチュルク諸語で一般的な総合的な方法による可能形と共に、分析的な手法での可能形モーダル形式が用いられるが、コンピュータと動詞の不定形を組み合わせる；Bol-al-am (COP-take-1SG) siožlia-mia (speak-INF) karajče (Karaim) ‘I can speak Karaim’ (Csató 2012)。コンピュータ動詞は存在も表すことから、カライル語とガガウズ語の分析的な手法による可能形形成には類似性がみられるとも考えられるが、このような分析的な統語法は何に由来するものかは現時点では不明である。

6. まとめ

本稿ではコピーの中でも、語彙そのもののコピーよりも、特に統語的コピーを中心にカライル語とガガウズ語での状況を略述した。バルト海沿岸地域で話されているカライル語と黒海沿岸地域で主に話されているガガウズ語は地理的な隔たりがあり、さらに系統的にもチュルク語の中で同じ語群に属さないけれども、両者にはいくつかの共通する言語特徴がみられる。本稿で考察してきたものに限るが、特に顕著な形態・統語的に共通する特徴として、次のようなものがみられた。

- 1) 口蓋化による音節間の調和
- 2) 形容詞や名詞の女性接辞などの形態的特徴のコピー
- 3) 関係代名詞の使用、否定辞の位置、VO 型の基本語順、後置詞型言語、被修飾部 (主要部) – 修飾部の語順、数量詞と主要部名詞の格の一致など
- 4) 分析的な可能構文 (存在動詞 + 疑問詞 + 動詞不定形) を持つこと

その一方で、カライル語のみにみられる個別的特徴として以下のようなものを考察した。

- 1) 形容詞の女性形活用のコピー
- 2) 一部の後置詞が格に変化
- 3) 属格付き修飾部と主要部から成る名詞修飾構造において主要部に付加される所属人称接辞が義務的にならないこと
- 4) V1+V2 複合動詞における V2 の衰退

- 5) 間接的経験を示すモーダル形式 *-mıŝ* の喪失
- 6) 疑問小辞 *czy* の統語的コピー

さらにガガウズ語のみにみられる個別的特徴として、本稿では以下の特徴があることを指摘した。

- 1) 不定法の消失（周辺のチュルク諸語にも共有されている特徴）
- 2) 不定法の消失の結果、バルカン言語連合のまとまりは拡大されるか、あるいは不定法の消失はバルカン地域に固有の地域的特徴ではない可能性があること
- 3) 言語接触による二重与格構文（ロシア語からのコピー）の発達
- 4) 分析的な可能構文（存在動詞＋疑問詞＋動詞希求形）を持つこと

これらの言語特徴は、主にロシア語やブルガリア語やポーランド語などのスラヴ系言語との言語接触による影響下で保持するに至ったものである。カライム語とガガウズ語に共通する特徴が存在することは、チュルク系言語とスラヴ系言語の言語接触にみられる普遍的な言語変化の一端を示しているといえる。上述したカライム語やガガウズ語のそれぞれに固有の個別的特徴は、接触の影響の違いを反映していると解釈できるかもしれない。例えば現段階では、カライム語のみにみられる形容詞の女性形活用のコピーは散発的であるが、もしモルドバのガガウズ語においてロシア語との言語接触がより著しいものになると、ガガウズ語においても形容詞の女性形活用のコピーがみられるようになるかもしれない。つまり適切な条件が整えば、女性形活用のコピーはカライム語とガガウズ語にも共有する特徴となる可能性もあるのではないだろうか。現段階では、複数の言語が関わる言語接触の状況で、それぞれの言語が及ぼす影響の度合いは明らかではなく、その方法論の確立が必要になる。今後の課題として解明しなければならない問題は山積しているが、そのいくつかを指摘したい。

- 1) チュルク諸語やスラヴ諸語に固有の接触による言語変化の問題としてではなく一般言語学的な問題として、著しい統語的特徴の変化（ここではOV的特徴からVO的特徴への変化）はどのような言語的状況があれば生じるのか、その必要十分条件を確定すること。
- 2) カライム語とガガウズ語に共通する社会言語学的状況は、周辺のイスラム教徒やキリスト教徒から隔離した状況下で宗教的に少数グループを形成してきたという点と共に、近年まで正書法が未発達であったという状況がある（cf. Comrie 1981）。カライム語ではヘブライ文字で記された宗教書が16世紀頃より存在していたが、近年

ではリトアニア、ポーランド、ウクライナなどそれぞれの地域における表記体系の異なりにより意思疎通の障害になっていた (Csató and Nathan 2007)。上述した 1) の問題を解明するための手がかりとして、このような社会言語学的状況との関わりを解明する必要があること。

- 3) カライム語とガガウズ語が日常生活において社会的優越性（例えば、公的教育で日常的に使用されている言語）のある言語であるリトアニア語やロシア語やブルガリア語との接触により何が要因となり、どの程度の影響を受けているのかを量的に解明すること。

これらの諸問題を解明するためには、チュルク諸語の研究者とバルト・スラヴ諸語の研究者が連携し、当該言語だけでなく類似した言語接触の状況を比較しつつ、必要に応じて質的調査と量的調査も併用して客観的にその要因を提示できる形で解明していくことが必要であろう。

略号

1	first person
3	third person
ACC	accusative
AOR	aorist
COP	copula
DAT	dative
GEN	genitive
INF	infinitive
INSTR	instrumental
LOC	locative
N	noun
NEG	negative
OPT	optative
PFT	perfective
PL	plural
POSS	possessive
PREP	preposition
PROG	progressive

PRS	present
PST	past
Q	question
SG	singular

注

- ¹ <http://www.statistica.md/pageview.php?l=en&idc=295&id=2234> (2018年4月12日アクセス)
- ² <http://censusresults.nsi.bg/Census/Reports/2/2/R7.aspx> (2018年4月12日アクセス)
- ³ <http://languagesindanger.eu/book-of-knowledge/list-of-languages/karaim/> (2018年4月12日アクセス)
- ⁴ 借用 (borrowing) という用語を用いることも多い。しかし借用は借りたものは返さなければならないという含意があるが、言語接触の現場では実際にそのようなことは生じないので、本稿ではコピー (copying) という用語を用いる (cf. Johanson 2002: 8)。
- ⁵ 言語接触理論の枠組みであるコードコピーモデルでは選択的コピー (selective copying) と呼ぶこともあるが (cf. Johanson 2002)、本稿ではわかりやすさを優先し、統語的コピーという用語を用いる。
- ⁶ <http://www.statistica.md/pageview.php?l=en&idc=295&id=2234> (2018年4月12日アクセス)
- ⁷ <http://www.nccedi.government.bg/page.php?category=83&id=247> (2017年9月30日アクセス)

参考文献

- Canhasi, S. ve N. Sulçevsi. 2012. Kosova Türk Ağızlarına Arnavut Dilinin Etkisi [コンボ・トルコ語方言へのアルバニア語の影響]. *ULUSLARARASI DİL VE EDEBİYAT ÇALIŞMALARINI KONFERANSI* “Türk ve Arnavut Kültüründe Ortak Yönler” 25–26 Mayıs 2012, Tirana.
- Comrie, B. 1981. *The language of the Soviet Union*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Csató, É. Á. 1999. Analyzing contact-induced phenomena in Karaim. In: S. Chang, L. Liaw and J. Ruppenhofer (eds.) 25th Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society, Special Session: Caucasian, Dravidian, and Turkic linguistics. *Berkeley Linguistic Society* 25, 54–62.
- Csató, É. Á. 2010. Report on an Uppsala workshop on Karaim studies. *Turkic Languages* 14, 261–282.
- Csató, É. Á. 2012. Lithuanian Karaim. *Tehlikedeki Diller Dergisi*, Cilt 1 Sayı 1, 33–45.
- Csató, É. Á. and D. Nathan. 2007. Multiliteracy, past and present, in the Karaim communities. *Language Documentation and Description* 4, SOAS, 207–230.

- Güngör, H. and M. Argunşah. 1991. *Gagauz Türkleri* [ガガウズ・トルコ人]. Ankara: Kültür Bakanlığı Yayınları.
- Johanson, L. 2002. *Structural Factors in Turkic Language Contacts*. Richmond, Surrey: Curzon Press.
- Johanson, L. and É. Á. Csató (eds.) 1999. *The Turkic Languages*. London: Routledge.
- Karlsruhe, C. 1999. Ottoman Turkish. In: L. Johanson and É. Á. Csató (eds.) 1999. *The Turkic Languages*, 179–202. London: Routledge.
- Kowalski, T. 1933. *Les Turcs et la langue turque de la Bulgarie du nord-est* [Kuzey-Doğu Bulgaristan Türkleri ve Türk Dili]. çev. Ömer Faruk Akün, *Edebiyat Fakültesi Türk Dili ve Edebiyatı Dergisi*, c.3–4, 31 Mart 1949, s. 499–500.
- 栗林裕 . 2010. 『チュルク語南西グループの構造と記述 — トルコ語の語形成と周辺言語の言語接触 —』 東京：くろしお出版 .
- Menz, A. 2003. Slav dillerinin Gagauzcaya etkisi [スラヴ諸語のガガウズ語への影響]. *Bilig*. S. 24, 23–44.
- Özkan, N. 1996. *Gagauz Türkçesi Grameri* [ガガウズ語文法]. Ankara: TDK yayınları.
- Pokrovskaya, L. 1972. Gagauz dilinin ve Balkan Türk ağzlarının bazı sentaks özellikler [ガガウズ語とバルカン・トルコ語諸方言のいくつかの統語的特徴]. In: *Bilimsel Bildiriler*, 231–235. Ankara: TDK yayınları.
- Pokrovskaya, L. 1978. *Sintaksis Gagauzskogo Yazyka*. Moskva: Nauka.
- Thomason, S. G. 2001. *Language Contact: An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Zajączkowski, W. 1966. *Język i folklor Gagauzów z Bułgarii*. Kraków.

オンライン資料

Национален статистически институт: <http://censusresults.nsi.bg/Census/Reports/2/2/R7.aspx>

National Bureau of Statistics of the Republic of Moldova : <http://www.statistica.md/pageview.php?l=en&idc=295&id=2234>

The “Languages in Danger” website: <http://languagesindanger.eu/book-of-knowledge/list-of-languages/karaim/>

The National Council for Cooperation on Ethnic and Demographic Issues in Bulgaria: <http://www.nccedi.government.bg/page.php?category=83&id=247>

**Turkish Minority Languages in the Balto-Slavic Area:
A Case of Karaim and Gagauz**

Yuu KURIBAYASHI

The Karaim language is native to an ethnic minority group in Lithuania whose members adhere to a non-Rabbinic branch of Judaism called Karaite. The language is critically endangered, belonging to one of the Kipchak groups of Turkic languages. While Turkic languages generally follow OV word order, Karaim has VO word order. The languages of Bulgarian Gagauz and Moldovan Gagauz belong to the Oghuz group of the Turkic language family; they share common linguistic features with the Karaim language such as OV word order. This paper discusses some aspects of language contact in the Balto-Slavic world with endangered Turkic languages, focusing on Karaim and Gagauz.